

# 愛のあるまち 茅野市

## 2019年

## 新春市長インタビュー



茅野市長 柳平千代一

### 今年の一文字「愛」

「まんやかに愛のあるまち茅野市」を実現するために「関心」「寛容」「連携」を心がけて下さい。



——昨年1年間を振り返り、どんな年でしたか。

様々な事業や仕組みが動き出した年となりました。また、年の初めの平昌オリンピックでは小平奈緒さんが金メダルを獲得するといった嬉しい出来事もあり、躍動的で充実した1年であったと思います。

——なかでも特徴的な出来事はありますか。

平昌オリンピックでは、小平奈緒さんの滑りや韓国の選手との心温まる報道から、多くの人が

が感動と勇気をもらいました。凱旋祝賀パレードでは、多くの市民が奈緒さんをお祝いすることができ、(特別)市民栄誉賞を贈ることができました。茅野市国際スケートセンターには、「NAO ice OVAL」の愛称を付けることもでき、とても嬉しい年になりました。また、3月にはワークラボ八ヶ岳がオープン。4月には諏訪東京理科大学が公立大学として開学。DMOも設立できました。その一つ一つが地域創生総合戦略に位置つけた事業であり、それぞれが形になったことは大変嬉し

く思います。5月には、当市を含む八ヶ岳周辺の14市町村が、縄文で日本遺産に認定されました。これは、広域的な縄文発信の追い風になったと思います。また、第5次総合計画のスタート、市政施行60周年の年でもありました。このように昨年は、盛りだくさんな年となりました。

——3期12年間の市政を振り返って感じることはどんなことですか。

一つ目は、パートナーシップのまちづくり。面としての展開を図る環境整備が大きな課題でした。パートナーシップのまちづくりの第一ステージは、市民活動団体との公民協働。私が市長になった時には第2ステージとして地区コミュニティ運営協議会ができ、これから面としての広がりを持たせるといってききましたので、かなりウエイトを置きました。「みんなで作る みんなの茅野市」を合言葉として掲げたにはそういう意味がありました。市民プランも「自助」「共助」「公助」の意識でまちづくりをしていこうということを盛り込みました。地区コミュニティセンターには、待ち

の姿勢ではなく、職員が地域に打って出ていくという思いを込めて正規職員2名を配置しました。実際、職員も積極的に地域に関わってくれ、それが今につながっていると思います。各地区で住民自治の意識が定着してきましたと感じています。

市民活動センター「ゆいわく茅野」ができたことで、第3ステージの段階に入り、あらゆる主体がつながりあえる仕組みができたと感じています。第1ステージの市民活動団体が今も頑張ってくれています。第2ステージの地区コミュニティ運営協議会もいい形になってきました。それらも含めて、あらゆる主体が「ゆいわく茅野」を通してつながり合えるということ、いよいよ第3ステージが動き始めました。これからさらにいい形になってくるものと期待しています。「災害に強い支え合いのまちづくり条例」をつくり、自主防災組織の活性化を図ってきたことも、「自助」「共助」「公助」の意識が市民の皆さんの中に自然に入ってきたのではないかと思います。

二つ目は、こども部の創設。茅野市はどんぐりプラン等を通

# 「愛」まんやかに

して、福祉分野と教育分野にブリッジをかけ、連携してきましたが、健康福祉部と教育委員会の2つの指揮命令系統があるという課題がありました。これを改善するため、2期目の時に理想の形は一つにすることと考え、こども部をつくりました。実際には保育士200人が一気に教育委員会に移るのですから、時の教育長は大変だったと思います。それをしっかりと受け止めてくれてこども部ができたことにより、乳児、幼児、小学校、中学校、高校、大学、生涯学習へと人育ちの流れが体系化できたと思います。それにより幼保小連携教育を始め様々な施策が連携を持てるようになりました。

三つ目は、縄文プロジェクト。平成21年に大英博物館（イギリス）に「縄文のビーナス」と「仮面の女神」を出展し、私も参加させてもらいました。この時、改めて「土偶」のパワーはすごいと思ったことが、縄文プロジェクト構想をつくるきっかけとなりました。縄文プロジェクト構想では、縄文の価値を考古学の世界だけにとどめず、生活の中で普遍性を持たせていくことと位置づけています。縄文ふるさ

と大使や縄文応援団、縄文検定、縄文科学習等を進める中で、縄文プロジェクトとして確立することができました。市民会議の発足により、多くの市民の皆さんとこれを進めていくことができています。八ヶ岳縄文ライフフェスティバルの開催、仮面の女神の国宝認定、「星降る中部高地の縄文世界」が日本遺産になつたりと、茅野市の宝を発信していく取組ができたということとは、12年間の中でとても大きなことでした。

四つ目は、諏訪東京理科大学



の公立化。3期目のこの4年間は、理科大学の公立化が大きい仕事であり、6市町村の大学として開学できたことに意義があると思つています。各首長を始め多くの人のご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。

もう一点、災害。平成21年に豪雨災害があり静香苑が被害を受けました。この時は1人の尊い命を失いました。平成24年は北山の豪雨災害。平成26年の豪雪。昨年、一昨年の台風による小江川の越水と災害もかなり起きています。これまで以上に防災、減災についての取組をしっかりとしないといけないと改めて思います。

——これからのまちづくりで重要と位置づけることは何ですか。

第5次総合計画のこの10年間はイメージし「関心」「寛容」「連繫」をあげます。「関心」いろいろなことに関心を持つことが、これからの人口減少、少子高齢化の中では必要になってくると思います。「寛容」支え合う寛容の気持ち。「連繫」一緒にやるということだけではなく、一緒にやることから次の展開に発展させていくような意味合いの連繫

が大事だと思えます。

——今年1年、どんな年になりそうですか。

様々な発展の芽が出ています。その芽をいかにうまく伸ばしていくか、楽しみな年になると思います。それぞれの動きをしっかりと伸ばすと同時に、様々な動きをどうつなぎ、関わりを持たせていくかで、予期せぬ面白い展開ができてくるのではないかと思います。

ぜひ「愛」を持って、「まんやかに愛のあるまち」を展開してほしいと思います。

